



これは『明晰なスピリチュアリティ』の普遍的な原則である。

【1】「源」の全一性：Oneness of "Source".

「源」は全一性という永遠の実相である。実相は誕生していないので消滅することもなく、永遠であるために時間はなく、全一であるため他の何かという状態はない。「源」は自己同一性として霊を延長している。「自己」は霊が自らを指す言葉である。「源」は、「愛」という状態にあり、「命」というポテンシャルを持ち、「光」という霊を保っている。ただし、分離した世界における愛情や生命や光とは違う。「源」は知覚できないため、「愛」や「命」や「光」も知覚できない。実相は全一性なので「愛と命と光」は一つであり、これを智識という。智識は「源」の心とも表現される。「源」は知覚できないので、智識とは新たに知ることではなく、元からそのように在る。

【2】幻想としてのドリーミング:"Dreaming" as an illusion.

「源」は「愛と命と光」という智識であるが、「自己」はその上に「情報とエネルギーと意識」というドリーミングを意志によって生成することができる。これは、智識という真っ白なキャンパスに自由に絵を描くことができることと似ている。意志は、図としての「現れ」と地としての時間と空間を同時に生成する。これによって世界が表現される。したがって、この世界は意志によって生成されたドリーミングであり夢である。実相が全一性であるため、ドリーミングの生成では、それが「現れ」ている世界と、それが「現れ」ていない他の世界も同時に生成される。

しかし、通常、意識が向けられるのは「現れ」ている世界のみである。「現れ」ていない世界を同時に知覚することも可能ではあるが、その場合は世界の視点を超越していなければならない。

【3】エゴとの同一化：Identification to the Ego.

エゴ（自我）は「全一性からの分離」という一点（ゼロ次元）の思考のことであり、この思考が自と他という区別を仮想的に可能としている。

エゴに囚われた状態で意志を使うと「自分」を中心とした世界というドリーミングが生成されて同時に体験される。

したがって、エゴは分離の思考に基づく意志であり、それが分離の幻想であるこの世界を生成している。

「エゴに囚われた状態」と表現していても、エゴは実体がない単なる思考であるため、エゴが意識を捕らえているのではなく、意識がエゴの中に自ら入ったということであり、これを思考との同一化という。

意識は分離の思考との同一化によって「自分」以外の他のモノが存在するという知覚を得ることができる。

そして、他のモノとの識別の上の一つの存在としての「自分」という知覚を得ることができる。

しかし、「自分」が一つの存在であると思えば込むほど、「自分」以外の多くの他のモノと離れていることが強調されて孤独を感じることになり、離れていることに対して罪悪感も生じる。

この罪悪感によって、常に「自分」が他の何かによって攻撃されて消えてしまうのではないか」という恐れを感じることになる。

そこで、「他のモノに負けない強さを「自分」が持たなければならない」と考え出す。これによって、生存と獲得という動機を持つことになる。

エゴへの囚われが強くなればなるほど、「自分」への執着は強くなり、同時に生存と獲得に対して強迫的になる。

生存と獲得という強迫観念においては、「自分」を消し去ろうとするモノは全て否定しなければならないのであり、そのため他のモノが「自分」の敵か味方かを判断することは大切であると考えられる。

判断は思考によって成されるが、思考は既にエゴを土台して成り立っているため、どうしても「自分」を超えた視点を持つことは不可能となっている。



【4】エゴによる「分離の妄想」と「恐れと怒り」：Ego's "Separating delusion" and "Fear and Anger".

エゴとは「分離の思考」である。それは、決して分離できない全一性（oneness）において「自分」という別な一つの存在を作り出そうと試みる思考実験であり、これは「妄想」である。その副作用として「恐れと怒り」が生成されている。

[1]分離の妄想：Separating delusion.

- (1) 全一性から一を分離することが可能であるという考えを持たなければならない。
しかし、そのようなことは不可能であったため、妄想から夢の世界を作ってその中に引きこもる。
- (2) 「自分」とは何かを知らないで、何が「自分」ではないのかという視点で夢の中の「現れ」について区別される。
分離のために「他」とは何かと考えなければならない。
- (3) より「自分」という存在感を強化するためには「他」との違いに注意しなければならない。
- (4) 「他」と「自分」の違いだけでは「自分」の価値を作り出せないため、さらに「自分」を強化するために「他」との差別化を計ろうとする。
- (5) 「自分」をより良くするための判断を「自分」が行うと、光か闇か、善か悪か、正しいか正しくないかという視点を持つことになる。当然「自分」は善の方でなければならない。

[2]恐れと怒り：Fear and Anger.

(1) 「自分」という存在感が増すにつれて、大元の状態から独立して「自我」を持ってしまったことから分離感が強くなっている。これによって不安を感じる。「神への恐れ」、「運命への恐れ」という形で感じられ、表面化すると「神への怒り」、「運命への怒り」となる。

※本来不安という感情は、妄想が始まって苦しまないように、全一性に戻れるよう用意されているセーフティーネットであるが、感情においても判断が出てしまうため、不安は悪いとされる。

(2) 多くの「他」に対して「自分」は一人であり力は弱いと考えることから、いつ「他」が侵入してきて「自分」が崩壊してしまうかと不安は強くなり、恐れを感じる。「他者への恐れ」、「社会への恐れ」という形で感じられ、表面化すると「他者への怒り」、「社会への怒り」となる。

※「他」の侵入というのは、「自分」の価値判断の土台となっているさまざまな思い込みからなる「観念」の上に想像される。例えば、「他」に属するルールや思想、価値観などを鵜呑みにしてはならないという考えである。「他」の侵入ということにおいて一番恐れることは、「自分」自身や「自分」の思想などが否定されることである。そのため、「他」に「自分」を完全に明け渡すということなどもってのほかであると考えてしまう。これは、たとえガイドであろうとも同じ考えである。

※ここでの恐れというのは不安が強化されたものであって、強い妄想の中のみ感じられる感情である。当然この感情もセーフティーネットである。

(3) 「自分」が「自分」の創造主として長い時間をかけて「自分」の価値を上げることができるだろうかという不安も出て来る。もし「自分」の判断が完全に正しければ、「自分」に対する不満など微塵も生まれなければならないが、実際はそうではない。そこで、「自分」は「自分」の創造主として不合格なのではないかという判断がなされて、「自分の判断ミスへの恐れ」、「自分の能力不足への恐れ」という形で感じられ、表面化すると「自分自身への怒り」となる。



【5】エゴの回し車：Ego's Wheel.

エゴは単なる思考であり、「自分」は一つのドリーミングであるため実体はない。そして、ドリーミングを保つには意識が向けられ続けなければならない。

そこで、エゴは「自分」という幻想を保つために、意識を「自分」に集中させるための仕組みとして、「恐れ」を利用した「罪と罰」という思い込みの還元的構造を作り出している。

これはネズミの回し車と同じような構造であるため、エゴの回し車と呼ぶことができる。この回し車により、生存と獲得の強迫観念が強化されていく。

これが全一性を思い出させないように仕掛けられたエゴの罠である。

意識を強く向けられた幻想の中では、実体験として「自分」が感じられ、時間も空間も現実的なものとして感じられるために、これが幻想であるということを疑うことは難しい。

同時に、エゴの罠によって「自分」という幻想の体験に現実感を感じているために、本来の「自己」は忘れられている。

【6】「自分」の価値：The value of "Myself".

全一性を思い出そうとすると「自分」が消える恐れも感じるようになるため、エゴに囚われた思考においては全一性に価値はないと判断される。

何であっても価値を見つけようとする、どうしても「自分」にとってのメリットを見ようとしてしまう。

これが、「自分」を超えた全一性を思い出そうという意欲を削ぎ落とす罠となっている。

本来の「自己」は全一性にあるため、もし本来の「自己」を思い出そうという意欲を持つなら、どうしても「自分」にとっての幸せや豊かさや健康といったメリットが必要となる。

これは「自分」を強化する罠であるのは確かであるが、意識を全一性に向けるためのきっかけに使えるのであれば良い要素ではある。

しかし、最後は「自分」への執着を手放すことは避けられない。

ただし、本来の「自己」を思い出してから「自分」への執着を手放すという穏やかな道を歩んでも良いし、「自分」への執着を手放すことで「自己」を思い出すというチャレンジの道を歩んでも良い。その道は自由に選ぶことができる。

本来の「自己」を思い出した瞬間には「自分」も世界も消え去る。それでも、また意識を「自分」に向ければ一瞬で世界も同時に作られる。

全一性において「消え去る」というのは、作られたものが無くなるということではない。作られもしなかった幻想から意識を離すということである。そのため、初めから何も起きてはいない。

エゴの幻想の中で価値があるのは、「自分」を強化するために獲得される幻想だけである。

たとえそれが肉体の死であっても、「自分」の判断に基づく選択であれば、結果として「自分」は肉体を超えた強さを得たと考えられる。

エゴの思考においては、「エゴは死にも勝る」のである。

いったん「自分」という幻想を肉体という幻想の上に生成して自覚を強化し、次に肉体を超えて「自分」は存在するのだという意志の強さを証明し、「自分」をこの世界を超えた崇高な存在へと成長させるというのがエゴの計画である。この計画の裏側には生存と獲得の強迫観念がある。

エゴの計画というのは決して「霊的な進化」ではない。

霊は「源」の完全さゆえに既に完成しているのだ。もし「源」の延長である霊が未熟であるとするなら、「源」は未熟であることになる。完全なる“場”である「源」がそのような現象を引き起こすことは不可能である。

「霊的な進化」というのは、霊が進化するのではなく、分離したと思い込んでいる「自分」という意識状態から離れて、そもそも分離などしたことがなかったと知っている本来の「自己」へと目覚めていくことを表現しているのだ。



生と獲得における「自分」の価値を手放して、本来の「自己」という永遠の価値に目覚めていくことが全一性を思い出す道である。

「自己」に目覚めていく道の途中では、「自分」にとっての幸せや豊かさや健康を受け取っていくことになるだろうが、それは目的ではなく、道の途中の美しい景色のようなものである。

「自己」を思い出していく分、その景色の美しさはどんどん鮮やかになっていき、やがて幸せで豊かで健康であるのは当たり前のことだと分かる。そして完全に目覚めると、既に「愛と命と光」という実相がある。これが紛れもない真実である。

【7】根源的な恐れ：Fundamental Fear.

エゴは思考であり脆い幻想である。その上に作られた「自分」もまた儂い幻想であるため、エゴによって生成されたドリーミングの世界は恐れで満ちている。

根源的な恐れというのは、「自分」が消えてしまうという「無への恐れ」であり、そこで最大の敵はこの恐ろしい世界を作った存在であると想定される。

この世界を作った存在という想定は「神」という概念を作り上げ、エゴはそこにも分離の視点を持ち込んで「神」と「自分」という対立構造を作り上げる。

こうして出来た「神」という概念は、「源」とはかけ離れているため「エゴの神」と表現しなければ混乱が起きる。

この混乱が多くの上対立する宗教を作り上げ、戦争を正当化することができるようになっている。

「エゴの神」は概念であり、象徴と物語によって作られている。

知覚というのは、分離の世界に幻想を知覚しているためにエゴに属する。そのため、知覚されている現実感に執着すると「自分」が強化される。

イメージは「現れ」の象徴であり、言葉はイメージの象徴である。そのため言葉は象徴の象徴である。

エゴはイメージと言葉を利用して幻想の知覚を強化する。

幻想の「エゴの神」を信じてしまうと、そこに属するイメージや言葉を否定することに罪悪感を感じてしまう。それほど意識は思考と同一化しやすい。

「神話」というのは言葉で「エゴの神」のイメージを作り上げているものである。

エゴに囚われた思考においては、エゴの概念に属さない「源」と「自己」については理解は難しく信じ難く、エゴの概念に属するものの理解はしやすい。

そのため「エゴの神」は「源」よりもイメージしやすく信じやすいのだ。

このように、分離の思考によって、幻想の世界の中に幻想の存在を作り出し、幻想の理解で納得しながら「自分」という幻想を強化しようと想定しているのがエゴである。

この世界そのものがエゴの幻想によるものであるため、この世界で体験される「現れ」はエゴに属することを忘れてはいけない。

エゴの思考が「自分」を作り出しているので、「自分」との同一化が強いとエゴはとても親しみを感じやすい。

そして、その親しいエゴが「自分」を取り消すような考えに対して罪悪感を持たなければならないと思わせるので、「自分」の概念を超えた全一性など肯定的に思ってみることもない。

それでもよく観察してみると、この世界ではどうしても「自分」と他者、「自分」と「神」という対立が生まれてしまう。

この対立をなんとかしようとするなら、「自分」を取り消してはいけないので、「自分」は完全に正義ではなくても、他者よりは正しいと考えざるを得ない。

もし、「自分」が悪いのだという思いで自殺を考えたとしても、必ずその裏側にはそのように「自分」を追い詰めた他者がいることを恨むことが可能な「自分」の正しさがある。

「自分」の正しさを持つ者だけが攻撃的になれるが、その考えは、他者も攻撃するという考えを生み出す。

この考えを「神」に対して持つのであれば、「神」という他者も「自分」を攻撃するかもしれないという概念を抱くことになる。



人生に苦しみがあるのなら、この苦しい状況を作り出して「自分」を攻撃している「神」に対して恨みを持つことが可能となる。

また、「自分」自身に恨みを向けることも可能である。これはとても都合が良く、「自分」を悪く思うことで他者を悪く言わない良い「自分」となることができ、同時に、そのような悪い「自分」を作った「神」に対しての恨みを持つことが可能となっている。

ただし、不完全で罪深い「自分」を作った「神」というのは間違いなく「エゴの神」であり、このような混乱を招いているのは根源的な恐れなのである。

根源的な恐れによって、「自分」を取り消すような新しい概念と出会うと、「自分」は攻撃されたと感じることが出来るのだ。

全てをクリアーにしてしまう明晰なスピリチュアリティへの抵抗はここから来ている。

【8】ガイドという「源」の力：Guide as the power of "Source".

体験されている世界が幻想であると信じられないほど現実的であるなら、エゴの思考と強く同一化しているということである。これは「自分」が強いということであるが、強さというのは筋力や権力のことでなく、「「自分」とは、これこれのような者である」という思い込みの強さのことである。

「自分」が強いなら、「これこれのような者」といえるような多くの幻想を獲得して来たことになる。そして、そのような「自分」を記憶し、生存させ続けているのだ。

しかし、幻想に囚われて「自己」へ戻れなくならないように既に「源」はセーフティーネットを用意している。

「源」と「自己」という全一的な関係においてセーフティーネットに名前などないが、忘れていた「自己」の状態へ戻れるように意識を導くという意味でガイドと表現する。

ガイドは意志によって生成されたドリーミングを取り消して智識に返還する「源」の作用であり、エゴと同一化された幻想の中では「自己」を思い出せるよう働く。

どのような幻想であってもガイドによって穏やかに智識へと戻されるため、幻想の強さや深さなどがあってもガイドには意味をなさない。

真に癒しとは、ガイドを通して「自己」として目覚める過程のことであり、それ以外の癒しがあるとすれば、幻想を強化し生存と獲得に駆り立てるエゴの強化でしかない。

したがって、癒されるということは、智識に支えられた本来の「自己」という状態が、エゴと同一化した意識状態に取って代わることである。

全ての者はガイドに助けられる。既に「自己」が答えなので、ガイドとつながることで思い出せる。

全ての者は智識の延長されたイメージであり、その輝きを共有することができる。

全ての者は意志を使ってエゴの幻想との同一化を強めることはできるが、ガイドの影響がない状態になることはできず、せいぜい分離の幻想を引き延ばすことしかできない。

幻想の世界において、意志とは「自分」にとって顕在的か潜在的かということではなく、無意識的にエゴに向けられているか、意識的にガイドに向けようとするかという選択でしかない。ゆえに、この世界における唯一の希望はガイドであり、唯一の責任はガイドを選択する意志である。

明晰なスピリチュアリティ
深瀬 啓介

"The Clear Spirituality - Universal Principles."
Keisuke Fukase.(fukase@cog.pw). 2019 April 11.